ある少年の延長戦。

匿名希望

注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

よくある神様からの説明も無しに自分は転生した。

どこかで見た気がする風景、常夏の日差しと赤い海。汎用人型決戦兵器にフォースチルドレン…

ああ、

「自分は乗りますよ、だって乗れるんですから」

エヴァの世界で死ぬまで生きることになった少年。彼の延長戦はどんな結末になっていくのだろうか？

処女作です、お見苦しい点や設定が違うとか矛盾点が出てくると思います。苦手な方はページを戻って下さい。

※更新は不定期です

目　次

おわりとはじまり ―――― 1

おわりとはじまり

深い闇の中をさ迷う。言葉にすればあっけないものだが実際にするとその辛さが分かる

もう既に何時間歩いているのだろうか。

この空間の中に時間を示す物や方角を調べる物がない

景色なんて無い上にこの空間の始まりの場所も分からない。

(正に無い無い尽くし、どうしたものかね)

なんでこんなところにいるのかやどうやって来たのか、もしかしたら連れてこられたのかも知れないが、今の自分にはそれを調べることは出来ない。

(それでも、何も分からないのなら分かるまで進むしかないか)

足元から素足独特ペタペタという足音がする。目から入る情報が少ない分、聴覚は鋭敏になっているらしい。

大丈夫、まだいける。そう自分に言い続ける

足元のペタペタと一緒に歩く

何時もの風景を取り戻したら、写真でもとってみようと自分に言う。

まだペタペタも元気だ
次に食べるご飯は肉じゃがにしよう、黒い食べ物はしばらく要らない。次の献立を決める。
ペタペタペタ
ジャージを洗わないと。忘れていた。
ペタペタ
今、友人は何をしているのだろうか
ペタ・・・ペタ・・・
自分の事を思っていてくれているのだろうか
ペタ・・・
自分は無事に帰れるのだろうか

見渡す限り黒の空間をつらつらと歩いているとつい思考が負の方向に転がっていく

ここを歩き続けていたら何時か死んでしまうのではないか？
むしろもうここは死の世界で、歩くことすら無駄なのではないか？

歩き始めこそ曖昧な、なんとかなるだろうという心で歩いてきていたが、ぐちゃぐちゃになった方向感覚や時間の感覚、何故か疲れが来ない身体は確実に心を蝕んで来ていた。

（もう・・・止めてしまおうか？）

ふとそう思った。

そうするとどうだろう、身体はあっという間に動かなくなり、猛烈な眠気が襲ってくる。

膝から崩れ落ちる、手が出ずに顔から地面に落ちていく。

パシャッ

「・・・水？」

いつの間にか足元は生温い水溜まりのようになっていたらしい、気がつかなかった。

温かくも冷たくもない、そんな微妙な温度の水。

例えるならこれは…

「血、みたいだなぁ・・・」

色は黒いが、水じゃないトロトロ感がそんな気を加速させる。

「そう言えば」

自分が妙に饒舌になっている。あまり喋らない方の人間だったはずなのに

「なんでだろ・・・」

ああ、まただ、足は動かないのに口はよく動く。

でも、もうどうでもいいや。

この血の様な液体に浸かっていると、溶け込んでいってしまいそうで…

そこで自分の意識は一旦途切れた。

願わくば、この闇から出られていますように・・・